

ら、或は固く、或は鋭く論述を進め、各種の問題を闡明せられたのであつたが、それにしてもその特徴は、精到無比の考證を基にした堅固な論斷に在つて、洞察は史料の示す論理的歸趣を落ち着かせる爲に、比較的僅かの場合に施されるに過ぎなかつた。従つて極めて僅少にして且つ曖昧模糊たる史料の上から、大なる結論を導き出さねばならぬ古代史の研究の如きは、古代史そのものについて卓越した一家の見を有して居られたに拘はらず、自らこれに突入する興味を有して居られなかつたやうに思ふ。博士の著述目録について見ると、百にもあまる論文の中、この部類に屬する述作が、僅に早期の稿に係る三篇より存しないのは、この消息を語るものに外ならぬ。所詮博士の學風は、どこまでも堅實にして正確を期する論理的特徴に存し、所謂「思ひ付き」を許さなかつたから、自然その開拓の範囲も、「思ひ付き」を容れる餘地の比較的多い古代史の域には及ばなかつたのであらう。

博士の論著に於て、その體裁上著しく目立つのは脚註の多く且つ長いことで、こゝにも博士の學風の特徴を認めることが出来る。學界に提供せられる論文の中には、所論の枝葉多岐に亘つて、讀者をして攻究の目的が何れに在るかを疑はしめるやうなのも少くないが、博士の述作に至つては、實に論旨整然として、その間聊も奔逸混雜の跡を認めない。煩はしい精緻な考證に於てよくかかる點を避け得られたのは、即ち博士の好んで用ゐられた脚註の效果に外ならぬ。各個の脚註はそれ／＼込み入つた考證を、丁寧親切に施した一篇の論文と見らるべきものが多く、主文は脚註の論ずる所に於て明らかにせられた結論を綴り合せたものであるから、至極簡潔に出来上り、何等の凝滯をも生じないのである。我が國に於て、學術に關する論文中にこの脚註を多く用ゐることは、本來歐洲學界に於ける體裁を受け入れたのであることと言ふまでもないが、内外博覽の博士は、歐洲の東洋學者中でも特に獨逸の學者